平成二十七年　六月三〇日発行
三重大学　日本語学文学第二六号　抜刷

葉山嘉樹「淫売婦」論

――プロレタリア文学の源流

尾西康充

葉山嘉樹「淫売婦」論

――プロレタリア文学の源流

尾西康充

一、「天の怒声」

葉山嘉樹には、自分の獄中体験を素材にして創作した「天の怒声」（「改造」第九巻第九号、一九二七年九月）という小説がある。「私」は、思想犯として一二カ月の刑期で服役している。隣の独房には、無期徒刑の囚人が収容されていた。「私」は一二カ月間、彼が口を利いたのを、一度も聞くことはなかった。

私は、運動の帰りに一度彼の監房を覗き込んだ事がある。その時、彼は監房の隅にうづくまつてゐた。そして、暗闇で光る豹の眼のやうな彼の眼光に、私は射すくめられた。

それは人間の眼ではない。と云つて又、動物の眼でもない。若し、生きた人間に、自然のと些も違はない義眼を二つとも嵌め込んだら、それは無気味に違ひない。

「無気味な」眼は「その義眼がたゞ一つの表情を持つて作られた」とでもいえるものであった。「私」には、それが「何と云ふ執拗な、何と云ふ射透すやうな、深い、鋭い、呪であるだらう」と感じられた。彼にとって、「私」は「同じやうに虐げられた彼の隣人」で、しかも「普通の囚人やうに、他の囚人を軽蔑しようなどとは、全で思つた事もない」。ただ「気の毒な男に話しかけようとさへして覗いた」のにもかかわらず、彼は「呪以外に何の光もない、その純粋な呪の眼で私を見た」のである。虱や蚤を潰すために、まるで「前足を縛られた猪」のように、黙ってコンクリートの壁に体をこすりつけるだけの隣房の男は、「未だ、ほんの人生へ出発を初めた許りの若者のやうに見えた」。

このような交錯する視線のドラマは、「淫売婦」（「文芸戦線」第二巻第七号、一九二五年一一月）に通うものがある。横浜南京街の倉庫の部屋には、「二十二三位の若い婦人」が全裸で横たわっている。彼女の周囲には、「嘔吐したらしい汚物が、黒い血痕と共にグチャ〳〵に散らばつて」、「髪毛がそれで固められてゐた」。「頭部の方からは酸敗した悪臭を放つてゐたし、肢部からは、癌腫の持つ特有の悪臭が放散されてゐた」。ひたすら死を待つしかない運命にある若い男性と女性に、「私」は限りない

共感を寄せるのである。

「天の怒声」では、雑役の掃除夫が食器差入口から奇妙なものを投げ込んできた。「新入の十五房から」の差し入れだというのは、「箸を十字架に結へて、それに足を縛つた生きた蠅が無数に、小さな麻糸で括りつけてある」のだった。

蠅は上手に生捕られて、足だけが縛られてゐるので、各各勝手な方向に飛ばうとして、ありつたけの力で羽を動かしてゐた。そのために、十字架の部分の方が少し浮くと思ふと、次には、足の方の部分が少し許り浮くのであつた。此フワ〳〵した、箸と蠅の十字架を見てゐると、覚えず、私は微笑んだ。

蠅を縛っている麻縄は、「プロレタリアは束縛の鎖のほか失うべきものは何もない」（『共産党宣言』）という言葉を薄気味悪くも、滑稽にも想起させる。本来イエスの自己犠牲を意味する十字架は、この場合、「食ふために働いたんだが、その働きは大急ぎで自分の命を磨り減し」てしまい、「皆が搾られた渣」になり果てた「被搾取階級の一切の運命」を象徴していると考えられるのである。

「私」はだれであるかも分からない「新入の十五房」のために、画鋲よりも小さい草鞋を、麻の屑糸で作りはじめた。例の蠅を「十四五」も縛りつけたうえ、草鞋を染めるための染料として「私の血を吸つて、だにのやうに円くなつて壁に止つてゐる蚊」を叩き潰し、「その赤黒い血」を塗った。蠅は草鞋を八方に引つ張りながら舞い上がったが、「自由の空を目がけて飛び去る代りに、各々勝手な方に引つ張るものだから」、「風呂桶の蓋のやうに熱く蒸された、監房の床板」に落ちてしまった。力を振りしぼって浮揚しようとするのものの、力及ばすにどん底にまで落ちてしまう姿は、「熱い鉄板の上に転がつた蝋燭のやうに痩せてゐた」女性に通じる。肺結核の子宮癌さらに、それは「病気なのはあの女ばかりぢやないんだ。皆が病気なんだ。そして皆が搾られた渣なんだ」という「ヨロケ」（粉塵による肺疾患）の男性たちにも通じるだろう。「ヨロケ」は「俺達あ食ふために働いたんだが、その働きは大急ぎで自分の命を磨り減しちやつたんだ」と告白するのであった。その後「私」は「そのいくぢのない蠅の奴等」を「ゴワ〳〵した官給の便紙」に包んで、雑役の掃除夫を通じて「新入の十五房」に贈った。

あるとき「私」が獄庭で運動をしていると、「上半身を大胆に丸出し」にした「新入の十五房」が独房の窓に姿を現した。そして「私」に向かって大きな声――「美しい、世界の隅々まで透るやうな声」――で歌を唄い出した。彼の名前は永島、古い友達の「艶歌師」だったことを思い出した。投獄の理由は、職務執行妨害罪と傷害罪であった。「涙脆い、気の柔しい、義の強い男」であった永島がなぜ、「巡査の佩剣が飴ん棒見たいに曲る程、人を打殴つたのか合点が行かなかつた」。数度の入獄で肺をひどく痛めていたにもかかわらず、永島は懲罰を恐れぬ振る舞いをする。そして「俺はなしくづしに自殺してるのだ。

又なしくづしに殺されてもゐるのだよ」と嘯くのであった。

かつてある事件のために、永島と「私」が被告として法廷に立ったことがあった。若林という名前の「学校出たての男」が「予審で輪に輪をかけて事件を大きく作り上げてしまつた」。公判が昼休みに入ったとき、永島は「犬奴！」と叫びながら若林の髪の毛を引っ掴んで蹴り飛ばした。外見上は「私たちの仲間中で一番穏かな人間に見えた」永島は、「そんな風に思ひ切つた事を、ポカッとやる男」であった。

「私」が永島のエピソードを思い出していると看守がやって来て、取調室に連れてゆかれる。部長が「おまへは今日歌を唄ふのを聞かなかつたか」と尋問する。「私」は話をはぐらかそうとしてまともに答えない。しかし「どの方面から響いて来た！」と問われると、とっさに「私は又、天が叫んだのかと思つてゐました」と答える。他の囚人もかばったとみえて、永島は懲罰を科せられなかった。

それにしても、他の連中は何と答へたのであらう。不思議なものだ。彼等は十五房を知つてはゐなかつたであらうのに、彼を不利な立場に置きはしなかつたのだ。

永島の歌をきっかけに、自然に結ばれた囚人同士の連帯。そして「その時の看守はそれ以後、段々人間が練れてきたやうに思はれた」。囚人を監視する看守さえも共感の絆が結ばれるようになったのである。一度は反発を感じた「蛞蝓」にも、小説の最後の場面では一円を渡し、しかも「渡す時に私は蛞蝓の萎びた手を力一杯握りしめた」。「淫売婦」では、「ビールの衝立ての向ふ」で臥していた女性の姿を、「私」は「淫売婦の代りに殉教者を見た」と描写されている。彼女は「被搾取階級」の一切を結ぶ《超越》的な象徴であったように、「白刃の刃を伝はるやうに、鋭く彼の声は獄庭に貫ぬき亙つた」という「憤りそのものの歌」であった永島の声は、囚人そして看守さえも結びつける《超越》的な力を持っていたのである。

二、殉教者と殉難者

浦西和彦氏は、日本近代文学館が所蔵している『淫売婦』三冊のうち、作家本人による書き込みがある一冊を調査した[1]。「淫売婦」のなかの一五か所におよぶ書き込みが明らかにされ、伏字とされた部分の原文が判明した。たとえば「彼女の……がねばりついてゐた」は「彼女の陰部の辺にも分泌物が一杯にねばりついてゐた」、「それが一々××××どうかは分らないが」は「それが一々やつたかどうかは分らない」、「人を救ふためには××××が唯一の手段ぢや」は「人を救ふためには暴力革命が唯一の手段ぢや」などである。そして作品の最後の場面に登場する「私は淫売婦の代りに殉教者を見た」は「私は淫売婦の代りに殉難者を見た」と訂正されている。浦西氏によれば、「葉山嘉樹が生前に出された「淫売婦」のすべては「殉教者」である。この書き込み本だけが「殉難者」と訂正されて

いる」という。[2]

だが「殉教者」と「殉難者」では、ニュアンスが大きく異なるであろう。「殉難」とは「国家や宗教などにかかわる危難のために、身を犠牲にする」ことを意味し、それに対して「殉教」とは「信仰のために生命を捧げる」ことに限定される。[3]

戦後日本社会で一世を風靡した田村泰次郎の「肉体の門」（『群像』第二巻第三号、一九四七年三月）には、米軍の爆撃によって廃墟となった戦後東京の街に生きる私娼たちが登場する。「群れ」の「掟」を破って伊吹と性関係を持ってしまったマヤが天井の鉄骨に宙吊りにされ、仲間からリンチを受ける描写である。

だんだんうすれていく意識のなかで、マヤは、いま自分の新生がはじまりつつあるのを感じてゐた。

地下の闇に、宙吊りのボルネオ・マヤの肉体は、ほの白い光りの暈につつまれて、十字架上の予言者のやうに壮厳だつた。

殉教者のように半裸の女性が宙づりにされてリンチを受けるという「肉体の門」の結末のシーンは、ジェームズ・ジョイス独特の「エピファニー」(Epiphanie) の方法――神聖で超自然的存在による顕示に従って物事や事件、人物の本質が露わになる瞬間を象徴的にとらえる―という描写に通じるものが感じられる。「淫売婦」の「私」にとっても、牢獄は幻影の世界であった。

私が歩き廻つてゐたその同じ獄庭を、厳重に金棒を張られた窓の中から見る時、それはもう決して前と一つのものではないのであつた。その金棒がまるで幻のベールでもあるかのやうに、獄庭は幻影化されて見えるのであつた。

このように「肉体の門」と「淫売婦」とは、作品世界の類縁性が強く意識されるのだが、これ以外にも、意外な共通点がある。GHQの検閲を研究する川崎賢子氏によれば、私娼たちが相手にしたのは、日比谷に総司令部を構える占領軍の兵士たちであったはずだが、「肉体の門」には米兵を客にとっている場面はまったく出てこない。その理由は、占領軍への批判や不信、怒りをかきたてるような女性との親密な交際を表現することが一切禁じられていたからだという。[4]

他方、「淫売婦」では、〝外国人〟に言及されるのは、「流石は外国人だ、見るのも気持のいゝやうなスッキリした服を着て、沢山歩いたり」、「外人相手のバーで――外人より入れない淫売屋で――又飲んだ」という二つの場面である。ただし実際に南京街を歩いている姿が描写されるわけでも、買春をしている場面が登場するわけでもない。楜沢健氏は「四十五度」斜めに傾いて存在する南京街が「日本の内なる「中国」」、すなわち「異質な「迷路」、見慣れない「謎」の世界」として存在していたことを指摘した。[5] 田村の場合は圧倒的な軍事力を背景にして占領する米兵を描くことが、米軍のプレスコードによって忌避された。それに対して葉山の場合は中国人を直接描くことはなかったものの、日本社会一般から蔑視のまなざしを向けられる

ことの多い反面、それを内破する潜在力を秘めた南京街（チャイナタウン）が作品の重要なカギとなっている。

三、敵と仲間

寺田透は戦後、葉山嘉樹の再評価をいち早く提唱した。特集「昭和の文学　葉山嘉樹」（「群像」第三〇巻第三号、一九七五年三月）では、寺田と中野重治、浦西和彦との鼎談が企画された。このなかで寺田は「葉山の作品で成功しているのは、どうしても敵が出てこない場合です。仲間同士でそれじゃだめだという、自分もだめなんだという、そういう仕組みのものにいいのが多いような気がする」と発言している。そして「戦いの文学というよりもシンパシーの文学ですね」と評価するのである。

たしかに葉山の小説には、《敵》よりも《仲間》である登場人物の印象が強く残る。監獄物でいえば、「独房語」（「文芸戦線」第五巻第九号、一九二八年九月）では、「旦那、わたしを一生涯此処に置いておくんなさい。わたしは此処の方が、よつぽど暮しやうございます」と懇願する雑役が登場する。「便器の溢れた囚人」（「改造」第一三巻第九号、一九三一年九月）では、雑役は、取り替えたばかりの便器から、あふれそうになっていた排泄物を廊下にこぼしてしまう。雑役は、囚人でありながら雑務に服することで、一般の囚人よりも優遇されている。むしろ看守に近い立場にあるといえるのだが、葉山の描く雑役は、ユーモラスで人間臭く、読者にとって親近感を強く抱かせられる存在である。

「淫売婦」の「私」の仇名は「民平」とされた。その名前は名古屋新聞記者時代（一九二一年六～一〇月）の葉山の筆名でもある。当時、葉山が執筆した文章の特徴は、「ほとんど無抵抗主義とも言うべき宗教的精神主義の労働理念」であったとされる[6]。葉山の胸底には、人間同士が闘争を激しく繰り広げるのではなく、《超越》的なものを通じて融和がもたらされるという信念があったと考えられる。「淫売婦」について蘆田英治氏は、「女は、第三項として排除されることによって逆に、「私」と蛞蝓達の共同性の構築を可能にする「一円」、すなわち一般的価値形態（貨幣価値）の役割を担って両者間を流通しはじめる」とする[7]。この作品の場合もまた、「第三項」すなわち《超越》的表象を担保として人間の「共同性」が構築されるのである。

治安警察法違反で検挙された葉山は、名古屋刑務所の未決監で「淫売婦」を書き上げた。葉山は執筆当時を振り返って、「あれは事実か、それとも創作か？」と、よく人に訊ねられるが、あれは獄中に於て私が経験した体験だと答へざるを得ない」と語っていた[8]。

> 娑婆に、老母と妻子三人、それを貧乏などと云ふもおろかな裏に残して、独房裡にあって、昼も夜も起きるでもなく眠るでも無く、考へるでもなく思ふでもなく、現ともなく幻ともなく、書き上げてしまつたら「淫売婦」が出来てゐた[9]。

前田角蔵氏によれば、葉山は「日本資本主義から構造的に排除された人々に対して、「階級」（革命）の側からも〈光〉をあてることによって、二重の不幸、暗黒を背負わされている人々の苦悩をも共有しえる地平を切り拓いた」という。[10] このような葉山の創作姿勢は、文芸戦線派と戦旗派という対立をこえて、プロレタリア文学運動の源流となっていった。小林多喜二の「自分にはグアン！　と来た。言葉通りグアンと来た」という「淫売婦」の読後感にも、そのことが如実に示されていたといえよう（一九二六年九月一四日日記）。

注　葉山嘉樹の本文は、筑摩書房版『葉山嘉樹全集』に拠った。

（1）浦西和彦「葉山嘉樹著『淫売婦』書き込み本（日本近代文学館所蔵）について―併せて葉山嘉樹未発表書簡二通紹介」（「日本近代文学館年誌」第六号、二〇一〇年三月、一四～二三頁）

（2）同右、二〇頁。

（3）「淫売婦」について、野崎六助氏は「彼女を毒々しいほどの汚物で飾ったのは、自らの性夢の露骨さを恥じ、自己処罰しようとする作者の分身的良識が働いたからだ」とし、そこに葉山の混沌とした「ピューリタン的マルクス主義」が存したとする（「葉山嘉樹における朝鮮人像（下）」、「インパクション」第一四九号、二〇〇五年一〇月、一六五頁）。

（4）川崎賢子「兵との交わり描かず　田村泰次郎「肉体の門」」（「沖縄タイムス」、二〇一〇年三月三一日朝刊）

（5）楜沢健「葉山嘉樹とチャイナタウン―「淫売婦」における「支那」」（「繍」第一一号、一九九九年三月）

（6）清水茂「名古屋の労働運動と葉山嘉樹（その一）」（「社会科学討究」第一〇巻第二号、一九六四年一二月、四〇八頁）

（7）蘆田英治「葉山嘉樹『淫売婦』を読む」（「論樹」第一三号、一九九九年一二月、四三頁）

（8）葉山嘉樹「「淫売婦」を書いた時の思ひ出」（「文章倶楽部」第一三巻第七号、一九二八年七月）

（9）葉山嘉樹「「淫売婦」の思ひ出」（『文壇出世作全集』、一九三五年一〇月、中央公論社）

（10）前田角蔵「「淫売婦」の世界」（「近代文学研究」第四号、一九八七年八月、四九頁）

［おにし　やすみつ　本学教員］